

# 覚えておきたい地域の希少な草の名前 ミツガシワ・タチスズシロソウ イヌスギナ・フジバカマ

# 便り



第5号 平成22年6月発行  
編集：海津西浜知内地域文化的景観まちづくり協議会

海津・西浜・知内地域文化的景観協議会では、六月二十日に、この地域の貴重な植物を知るための観察会を、滋賀県立大学の野間直彦先生を迎えて開催しました。梅雨期にも関わらず天候に恵まれ、この地域に残る貴重な四種類の植物が自生している姿を見ることが出来ました。特に、権水湿地近くの田んぼのあぜに自生するミツガシワは、特に希少で、野間先生の言葉を借りると、



「これが生えているだけで天然記念物にしていてもいいくらい」とのことでした。そしてこれらの四種の小さな植物全てが、人の手入れが行き届いた田んぼのあぜ、川の土手、我が家の裏庭のよ

うに手入れがなされた砂浜など、人が自然に関わっている場所にあります。もし人の手が入らなければ、ススキやハンノキのような大きな植物の日影となって駆逐され、逆に人が除草剤などを撒いてしまうとなくなってしまう、その後は旺盛な繁殖力を持つ外来性の植物が、その陣地を奪ってしまう。その植物の生育は、人と生態系の微妙なバランスの上に成り立っていて、そのどこかが崩れてしまうと絶滅してしまうとのことでした。

また、野間先生は田んぼのあぜを見ても、こちらはの田んぼのあぜは除草剤が使われていて、こちらの田んぼは丁寧に草刈がされている。あぜの植物が片方は外来種ばかり、もう片方は日本の昔からの種が混合して生えていると指摘され、確かに良く見ると生えている植物の違いがわかるのですが、なるほどと、植物学者の観察眼に感心させられました。

地元の方々も、「そんな草があるんやったら、もうちよっと気を（裏面へ続く）」

海津 西浜 知内  
三十六景  
其の5

## 里の草花

奥田沼と周辺の田んぼの畦の  
イヌスギナ

権水湿地近くの田んぼの畦の  
ミツガシワ

西浜の砂浜の

タチスズシロソウ  
境川河口付近の土手の  
フジバカマ



四つの植物が、

この地域にある希少な種

それらは全て、田の畦や

素掘りの川の土手の草を刈り

砂浜でさえも、

我が家の裏庭のように手入れする

そんな人々と植物との

共存関係の中で生き残っている

里の植物達である

(表面より続く) 付けて草刈しよう。」とか「田が深く大きな機械も入りにくいし、耕作者も高齢化していて、どこまでこの環境が維持できるか。」などの問題意識が芽生えたことも、この観察会の成果の一つではないかと考えます。

それでは、当日観察した植物をひとつひとつ紹介して行きます。

◆フジバカマ

境川河口、橋の少し上流の土手に自生している。原産は中国ともいわれるが、万葉の昔から日本人に親しまれてきた。秋の七草としても知られているが、現在、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧(Ⅱ)種に指定されている。園芸品種もあるが、このものは野生のもので貴重であるとのこと。

すくっと立っているのがフジバカマ。写真の石垣は誓行寺。せせらぎの辺りは木の



杭やせき板でコンクリートの土木工作物がなく、その土手を毎年草を刈って手入れする。という昔ながらの状況が、この植物をここに残している。

◆ミツガシワ

西浜の山手、権水湿地近くの田んぼのあぜに自生している。北海道から東北地方の寒冷地の湿原に生息し、マキノにあるこのミツガシワがほぼ南限。京都の深泥池に孤立的に群生しているものは、それを含む水生植物群落が天然記念物に指定されている。

葉は三つ分かれていて、家紋のミツガシワに似ていることが名前の由来。春に細かい可憐な白い花を多数咲かせる。



◆タチスズシロソウ

西浜の砂浜、この植物は、湖岸に一番近い貧栄養の場所に自生する。アブラナ科の小さな草で、四〜五月に小さな白い花が咲く。日本の内陸に海浜性植物が分布してい



は、以前にも増して重要になっている。写真は観察会の当日、菜種のようなサヤ状の実を付け枯れかけている状態。

◆イヌスギナ

奥田沼の水際(写真上)や奥田沼を源とする中ノ川の水田のあぜ(写真下)などに群生する。長野から関東以北の本州と北海道で、日当たりの良い湿地に群生する。マキノのものが南限に近いのではないとのこと。スギナという名前の通り、ツクシに似ているが違う種で、大きさが二〇〜六〇センチとかなり大きい。田の中に祠が残る昔からの景色とあいまって風情がある。

